

意見陳述書

2015年12月18日

佐賀地方裁判所 民事部 御中

原告 青柳行信

1、原告の青柳行信です。

2011年4月20日に九州電力本店前の路上に座り込み用のテントを立てるようになって、今日で1703日、4年と242日目になります。

もともと私はいちクリスチャンであり、いち中学教員でした。高校生のときに手にしたドストエフスキーからロシア文学に関心をもち、ロシア文学を理解するために聖書の勉強を始めました。非暴力を貫いたイエスという一人の男の生き方に感銘を受け、大学でも神学を学びました。一時は聖職を志しましたが、教員の道を選びました。

教員になってからは、自由な時間の多くを難民支援などの人道活動に費やしてきました。1990年代、日本の経済政策に翻弄され、不法滞在者とされた日系外国人労働者たちが日本中に溢れていました。彼らは、遠く離れたこの異郷の地で、食べ物も、身体を横たえる場所さえも失いました。彼らに温かい飲み物を与え、知人や教会などのつてをたどり、安心して身を横たえる場所を探す。寝食の場が見つかって生活必需品がないので知人を頼って手配する。朝起きると、また次の難民が自宅の玄関前に立っていて、「アオヤギサン、タスケテクダサイ」と訴えている。来る日も来る日もこのような生活を送っていました。

原発についても、問題意識はもっていました。

1970年代、日本政府は、原発から出る核のゴミを南太平洋のマリアナ海溝に投棄しようとし、近隣のベラウ共和国の島民たちが抗議の声を挙げました。日本政府は、ゴミは頑強なドラム缶に入れるので安全だと説明しましたが、島民たちは安全であれば東京湾、皇居の堀に投棄すればいいと迫りました。当時の雑誌に、通産大臣がドラム缶を抱いて『安全ですよ』と言っている風刺画が掲載されていたのを覚えています。

1986年にチェルノブイリ原発事故が起きたときには、日本にも放射性物質が飛んできて大変なニュースになり、私も生徒達と一緒にチェルノブイリの映像を観て、原発について学びました。

しかし、それ以上のことはできませんでした。

そうして私は2011年3月11日を迎えました。

テレビや新聞にうつる原発を前に、私は衝撃をうけました。もし助かることができたならば、子どもや、まだ幼い孫たちのために、私の残された人生のすべてをかけて原発をなくしたい、そう思いました。

その思いを今も持ち続け、座り込みを続けています。

2、私の1日は毎朝、早朝5時に起きて、私のテントを応援してくれている全国約5000人の方々に原発のニュースを満載したメールを配信することに始まります。

それが終わると、九電本店前に向かいます。福岡市の中心街、渡辺通りに電気ビルという大きなビルがあり、そこが九電本店です。午前10時にその電気ビルの前に行き、歩道にテントを張って座り込みをします。

私のテントは、2メートル×2メートルを二張りの、吹けば飛ぶほどの簡素なものですが、毎日、実に多くの人々が訪ねてきます。

原発を止めてほしい！と切なる思いで来る人、福島や関東から避難してきた人、原発のことを知りたい人、原発に賛成の人、反対の人、よくわからない人、九電で働く人、私を「博多湾に投げ込むぞ」「玄界灘に投げ込むぞ」という人。原発のこと以外にも、長年引きこもっていた人、持病を抱えた人、老々介護の人、認知症の介護をする人、ニート、フリーター、派遣労働者……。

簡素な路上のテントですので、質素なパイプ椅子で休んでもらい、温かい飲み物を差し出します。

夫を関東に残し幼い子どもと避難してきた若い女性は、避難について夫の理解が得られず、義理の母からは精神科を受診するよう勧められていると苦しい胸の内を語ってくれました。

この女性のように、遠く離れた異郷の地で、身寄りも、安心して不安を打ち明ける居場所もない多くの難民が生み出されてしまったのです。

毎日のように私のテントに通っていたこの女性も、ふっと顔を出さなくなりました。

九電の役職のある方もテントを訪れます。自身も中学生、高校生のお子さんがいるとのことで、避難者の方の話が聞きたいと何度か足を運ばれました。「九電の社員がみな原発推進だと思われては困る」とも仰っていました。

過去に原発で働いたという男性とも出会いました。作業後に原因不明の鼻出血や全身倦怠感に苦しみ、やがて心筋梗塞を発症したというその男性の労災認定を求める裁判の支援活動にも取り組むようになりました。

3、私のテントには、九州だけでなく、全国から、韓国、アメリカ、カナダ、

ドイツ、チェチェンなど海外からも訪問者があります。

九電本店前の路上は九電本店前ひろばと呼ばれるようになり、郵便物まで届くようになりました。私をひろばの「村長」と呼ぶ人もいます。

2011年11月13日には、多くの人々の呼びかけで、「さよなら原発！福岡1万人集会」が福岡の舞鶴公園で開かれました。私は、ひろばの村長としてこの集会の代表に推され、集会直前には韓国を訪問し、韓国各地で集会への参加を求めました。

集会当日、驚くことが起きました。全国各地から、子ども連れの若い夫婦、学生さん、青年、農民、市民、生協、労組、政党を含め約300の団体、1万5000人もの人々が、立場の違い、宗教や思想、考え方、国籍の違いを超えて舞鶴公園に集まってくれたのです。

集会参加者で九電本店前までパレードをし、自然と沸き上がった「命が大事」「子どもを守ろう」といった声が、九州一の繁華街天神に響きわたりました。

その後も福岡市の冷泉公園や舞鶴公園でたびたび市民集会を開いてきましたが、その度に私は、人々の心の中には原発からの脱却を求める切なる願いが生まれ、渦巻いている、と改めて実感します。

4、私は、今の原発の問題は、倫理、良心のあり方が大きく問われている問題だと思っています。

福島第一原発事故は、森羅万象に放射性物質を降り注ぎ、人々は故郷を追われ、家族と離れ離れになり、生活の糧を失い、時には孤独に苦しみ、時には差別に絶望しています。万物を傷つけ、破壊、死滅させています。

医学界には生命倫理が、経済界には企業倫理が、情報を扱う人々には情報倫理があります。法曹界にも法曹倫理がありますし、証人は良心に基づいて宣誓をします。

科学技術にも社会的規範があり、倫理的規範があります。福島第一原発事故の後にいち早く脱原発へと舵を切ったドイツでも、脱原発の政策決定に大きな役割を果たしたのは倫理委員会でした。ドイツ連邦政府は、2011年4月4日、学者・宗教者・労働代表者など17名からなる、政府から独立した「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」を立ち上げました。委員会は、5月30日、ドイツ連邦政府に報告書を提出し、メルケル首相はこれを重く受け止めて原発停止・廃止を目指すことになりました。

5、私たちは現在、岐路に立っています。命の豊かさを生き続ける道を進むのか、破滅と死の道を選択するのか。

科学技術の粋を結集したといわれる原発は聖書にみる現代のバベルの塔で

す。ひとは、神の声を無視して天に届く塔を造ろうとし、破滅を招きました。

神の声とは良心の声です。原発がもたらす「恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する」ことは、私たちの良心から湧き上がる根源的な願いです。

私たちが原発の前で震え慄く今日、まさにこの時、裁判官におかれても、心の深奥で静かに響く良心の声に真摯に耳を傾け、司法に課せられた使命を果たすべく心を奮い立たせていただきたいと切に望みます。私たちは、その良心の声を、より多くの市民に、世界中の善意ある市民に伝えます。

この司法の判断が、子や孫に誇れる、歴史に耐えうるものとなることを期待します。

以上